

理想国家建設の夢

ーユートピア思想・スピリチュアリズムと社会改革運動

稲垣伸一

I 南北戦争開戦までのアメリカ社会

南北戦争勃発以前のアメリカ社会は、発展と社会矛盾の顕在化という両義的特徴を持っていたと言えるだろう。19世紀前半におけるアメリカ社会の発展としては、次の三つのことが挙げられる。第一に「ジャクソニアン・デモクラシー」(Jacksonian Democracy) という言葉に象徴される民主主義の社会への浸透である。第二は、産業の飛躍的発展である。これは、農業においては、産業革命を経て繊維産業が発達した結果、綿花の需要が格段に増加し農業の発展につながったことや、工業においては、蒸気船や鉄道の普及により交通網が整備され大量の物資が輸送可能となり、鉄鋼業などの重工業が飛躍的に伸びたことに見ることができる。第三は、領土拡張である。建国以来、大西洋岸の東海岸側から次第に西へと領土を拡張してきたアメリカ合衆国にとって、19世紀前半は領土をさらに西へと広げていった時代だった。

しかし、たとえば西部への領土拡張がアメリカ合衆国にとっては発展を示す事実であったにしても、その負の側面を見逃すことはできない。1845年のテキサス併合にしても、1848年のカリフォルニアを含む広大な領土が割譲されたのも、武力を背景として実現した帝国主義的な政策の表れであったからである。そして領土が拡大するにつれて進む西部開拓においては、「明白な運命」(Manifest Destiny) という思想が盛んに喧伝される。これは、民主主義がアメリカ大陸全土に広がることは、神から与えられた明白な運命である、とする考えで、キリスト教の福音主義を帝国主義に結びつけ、領土拡張を正当化しようとするものだった。

社会の発展に伴うこうした負の側面は、西部開拓だけでなく、社会の他の側面にも現れてきた。この時代、最も深刻な対立を生んでいたのが奴隷制の問題である。アメリカ南部の農業は元々奴隷制を基盤に成立していた。そして綿花の需要が増大したことは、労働力としての奴隷の需要を増大させた。

他方、1833年には「アメリカ反奴隷制協会」(American Anti-Slavery Society)が設立され、北部における奴隷制廃止運動は活発化する。その一例として挙げられるのが「地下鉄道」(Underground Railroad)と呼ばれる非合法組織の活躍で、これは、南部からの逃亡奴隷を北部自由州やカナダへと逃がすネットワークである。ちなみに奴隷の過酷な運命を描いたハリエット・ビーチャー・ストウ (Harriet Beecher Stowe) の『アンクルトムの小屋』(*Uncle Tom's Cabin*, 1852) が出版されたのもこの時代である。

19世紀前半、奴隷制をめぐる南北の対立は激化し、双方の間で妥協が繰り返される中、奴隷制の存廃という問題そのものの結論は先送りされた。1820年には「ミズーリ協定」(Missouri Compromise) が結ばれ、当時のミズーリ準州が奴隷州として連邦に加入する代わりに、北緯36度30分以北での奴隷制が禁止された。また、1850年には「1850年の妥協」(Compromise of 1850) と呼ばれる取り決めが北部と南部でなされ、カリフォルニアが自由州として連邦に加入する代わりに、南部を逃亡した奴隷を北部自由州においても拘束することができる「逃亡奴隷法」(Fugitive Slave Act) が制定された。この二つの出来事は、西部開拓が進み、アメリカ合衆国に新たな州が生まれる時、新しい州で奴隷制を認めるか否かをめぐって南北の州が激しく対立したことを表している。

アメリカ合衆国は独立宣言において「すべての人間は平等に造られ、誰にも譲ることができない一定の権利を与えられ、この権利の中には生命・自由・幸福の追求が含まれる」(Jefferson 19) ことを高らかに宣言している。そのアメリカ合衆国が、独立後約半世紀を経てその理想との矛盾に悩んでいた姿を、奴隷制をめぐる南北の対立は雄弁に物語っている。

その独立宣言前文と照らし合わせた時、顕在化してくるもう一つの社会矛盾が女性の地位の問題である。1848年、ニューヨーク州西部の小さな町セネカ・フォールズで、アメリカ初の女性の権利を求める集会が開催された。これを主催したのは、のちにアメリカ女性運動を先導するエリザベス・キャディ・スタントン (Elizabeth Cady Stanton) やルクレシア・モット (Lucretia Mott) たちだった。このセネカ・フォールズの女性大会以降、1920年憲法修正第19条により女性参政権が認められるまでの女性運動は「第一波フェミニズム」(the First Wave feminism) と呼ばれる (Evans 1, 5)。この大会開催に因んで、現在セネカ・フォールズには「全米女性殿堂」(National Women's Hall of Fame) が存在し、アメリカにおいて女性の地位向上に尽力した人々が顕

彰されている。

1848年のセネカ・フォールズ女性大会で決議された項目には、後の時代につながる二つの主張が含まれていた。一つは女性の財産権で、もう一つは女性の参政権である。その当時の女性は財産を管理する権利が認められておらず、未婚時代には父親が、結婚後は夫が財産に関する権限を持っていた。女性自身が自分の財産を管理する権利を持たなかったため、それが女性の自由を大きく拘束しているとして、財産権を女性に認めさせることは女性の解放にとって最優先課題と位置づけられた。また財産権ほど危急の課題としての認識は薄かったと言われているが、参政権も女性の意見を広く政治に反映させる手段として、長期的展望に立てば女性の地位向上や自由の獲得のために不可欠のものとして主張された。女性が選挙で投票する権利はもちろん、公衆の前で演説すること自体が非難される時代にあって、女性の主導で女性の権利を主張する大会を開くということは、19世紀前半のアメリカ社会では画期的なことだった。

19世紀前半のアメリカ社会とは、奴隷制廃止運動や女性運動に見られるように、人種や、ジェンダーと現在では呼ばれる男女の差異について意識が高まり、それがアメリカ建国時の高い理想との矛盾として、まだ一部の人々によってにせよ、意識されはじめた時代と言えるだろう。

II ユートピア運動の隆盛

建国時の理想と現実との矛盾が顕著になっていくのと同時に、19世紀前半のアメリカ合衆国では、理想的な社会を築き上げようとするユートピア的生活共同体の建設が盛んとなった。ユートピア的生活共同体はアメリカ北東部を中心に建設され、特に1840年代以降ニューヨーク州西部で盛んとなる。このニューヨーク州西部というと、アメリカ初の女性大会が開催されたセネカ・フォールズを含む地域でもある。ニューヨーク州西部で女性運動とユートピア的生活共同体建設が流行したのは偶然ではなく、そこには二つの背景があると考えられる。

一つ目の背景として挙げられるのが、1825年のエリー運河開通である。エリー運河はニューヨーク州の東部オルバニーから西端のバッファローまで、ハドソン川と五大湖の一つエリー湖を結び、水上交通の要として19世紀前半アメリカの産業発展を促した。エリー運河の開通に伴い、アメリカ北東部の

ニューイングランド地方からニューヨーク州西部へ多くの人口が移動し、運河沿いには現在も多くの人口を持つバッファロー、ロチェスター、シラキューズといった都市が産業の発展と共に経済的に繁栄した。(Cross 55-67)

二つ目の背景は、「第二の覚醒」(the Second Great Awakening) と呼ばれるキリスト教の信仰復興運動である。これは1820年代にピークを迎えるアメリカ北東部東海岸沿い、マサチューセッツ州なども含む広い地域に渡った運動であり、この信仰復興運動はアメリカ東海岸から西の内陸部に位置するニューヨーク州にも及んだ。聖書の教えを厳格に守り、人間は生まれながらに罪を背負っているとするピューリタニズムは、アメリカ北東部に植民地が建設された当初から強い影響力を持っていた。それに対して「第二の覚醒」という信仰復興運動では、ピューリタニズムとは異なるリベラルで新しい宗派が現れ、時には指導者の扇情的で情熱的な説教が大衆の心を捉えた。この信仰復興運動の影響を強く受けたのが、エリー運河開通により現れた新しい都市を抱えるニューヨーク州西部である。(Cross 2-13) そこに移住した多くの新しい市民は、新しい宗派を受け入れ、それが後に女性運動やユートピア運動など社会改革運動を盛んにした一つの要因であると考えられる。

大きな人口移動を促したエリー運河開通という物理的背景と、リベラルな社会改革思想を受け入れやすくした「第二の覚醒」という宗教的背景により、ニューヨーク州西部には三つのグループに分けられるユートピア的生活共同体が形成された。第一に、「第二の覚醒」という信仰復興運動のさなかに、多くの信者を獲得したキリスト教新興宗派に属するグループ、第二に、フランスのユートピア思想家シャルル・フーリエ (Charles Fourier) の思想を基盤に共同体を形成したグループ、第三に、そのどちらでもなく独自の思想に基づき共同体を形成したグループである。この三つのグループはそれぞれが社会改革思想を持ち、特に共同体内の女性のあり方について特徴が見られる。

第一のグループとして一例を挙げるなら、ニューヨーク州に共同体を形成したシェイカー (Shaker) と呼ばれるキリスト教の一派がある。現在もニューヨーク州の州都であるオルバーニー郊外には「シェイカー・ヴィレッジ」と称して、19世紀当時のシェイカーの建物が復元され、一般に公開されている。シェイカーは元タイギリスで、クエーカーと呼ばれるキリスト教宗派から18世紀に独立した人々で、迫害を逃れて女性指導者アン・リー (Ann Lee) に先導され1774年アメリカに渡ってきた集団である。そして1830年の最盛期には約4000人の信者を数えた。(Foster 17, 22-23) その名前が表しているように、

礼拝は体を「シェイクして（揺すって）」踊るような独特の形式で行われる。彼らの礼拝の風刺画では、白人の信徒の中に黒人も含まれており、この集団が白人だけでなく黒人も受け入れていたことがわかる。



シェイカーの礼拝の風刺画 (Foster n.p.)

シェイカーの教義を際立たせる一番の特徴は独身主義である。礼拝を執り行うときには、男女の集団は別

の位置に立ち、また食堂に集まって食事をするときでも、男女の席は厳格に分けられていた。(Foster 20-22) 指導者が元タン・リーという女性であったことも、当時のキリスト教宗派としては特徴のあるものだったが、彼らの独身主義は、結婚という一つの社会的制度に異を唱え、女性の自立を目指したものとも考えられる。一般社会における奴隷制や女性の地位についての運動とは一線を画していたものの、シェイカーの共同体はこの二つの問題に独特の形で反応したものと推測できる。

ユートピア的生活共同体を形成した第二のグループは、「ファランクス」(phalanx) と呼ばれる生活共同体を建設し、フランスの思想家シャルル・フーリエの思想に影響を受けたグループである。このグループは1840年代フーリエの思想がアメリカに紹介されると、北部を中心に東はマサチューセッツ州から西は中西部アイオワ州まで20余りのファランクスが形成されるほど流行し、ニューヨーク州西部だけでも5つのファランクスが建設された。(Guarneri 30-34, 60, 418) フーリエの思想は初期社会主義とも呼ばれ、共同体運営に必要な経費調達のため、メンバーから出資を募り、原則個人財産は認めず、メンバーの役割分担によりできるだけ共同体内で自給自足の生活を目指すものだった。一人一人のメンバーが幸福に生活を営む調和した社会の実現を目指すものだったので、必然的に共同体内には社会改革を目指す思想が共有され、奴隷解放の思想も多くファランクスで持たれていたようだ。また、女性の地位の問題についても意識され、急進派は既存の結婚制度が女性を束縛している元凶と考え、結婚制度の廃止を主張する者もいた。(Guarneri 351-63) こうした思想は「フリー・ラヴ」(free love) と呼ばれ、墮落した男女の性的関係を連想されたことから、また女性に関するリベラルな思想ゆえに、ファランクスは一般社会から糾弾されることもあった。

ユートピア的生活共同体の第三のグループとして、独自の社会改革思想の元に形成されたオナイダ・コミュニティー (the Oneida Community) がある。これはジョン・ハンフリー・ノイズ (John Humphrey Noyes) の指導の元、セネカ・フォールズでの女性大会開催と同じ1848年に、やはりニューヨーク州に建設された。オナイダ・コミュニティーも他のユートピア的生活共同体と同様、調和した理想の社会を作ることを目指したが、この共同体は女性の地位については特に意識の高かった共同体と言える。オナイダ・コミュニティーの特徴は、「複合結婚」(complex marriage) と呼ばれる一種の多重結婚の制度を採用したことだった。(Foster 85-86) そしてこの制度がフーリエ主義のファランクス同様、淫らな男女関係を外部の社会に想像させたことから、オナイダ・コミュニティーは世間の非難の的ともなった。

しかし、世間の批判の元となった複合結婚は、実は自由な恋愛を可能にすることにより男女の平等と女性の解放を目指したものとも言われている。そこにはファランクスと同様、既存の結婚制度に対する批判があり、世間からはフリー・ラヴ思想と一括りにされ批判の的となる思想は、そもそも女性の解放を目指した思想と考えられる。実際、オナイダ・コミュニティーにおける複合結婚とは、淫らな男女関係とは対照的に、男性の側に性的衝動の抑制を課す制度で、自由意志による恋愛関係を認めると同時に、女性の意志を極力尊重しようとするものだった。また、このコミュニティーには、女性の立場を尊重する思想の表れとして、女性の身体・女性の健康を守る思想が含まれていた。オナイダ・コミュニティーの写真をみると、女性の髪は短く、膝下ほどのスカートの下にズボンのようなものを身につけているのがわかる。これは19世紀前半のアメリカにおいて、主に女性の身体に関する健康改革 (health reform) の思想の反映である。(Foster 91-92) 19世紀前半の女性は、コルセットによりウエストを不自然なほどに絞ったド



1870年代オナイダ・コミュニティーの男女
(Foster n.p.)

レスの着用を伝統的に強要され、それが健康を害する大きな要因となってきた。そうした女性のあり方に異を唱えたのが健康改革の一部でもある服装改革 (dress reform) で、そこではブルーマーと呼ばれるズボンとスカートを組

み合わせたような服を着用することが主張された。ちなみにブルーマーは、日本ではかつて体育の授業で女子生徒が身につけたズボン状のものに名を残し、その名称は広く知られてもいた。オナイダ・コミュニティの女性メンバーに見られる短い髪とブルーマーは、伝統的に作られた女性のステレオタイプからの解放を意味し、その女性が好きな男性と楽しげに会話をしている姿は、オナイダ・コミュニティが目指した男女の平等と女性の解放を象徴的に表していると言える。

III スピリチュアリズム（心霊主義）の流行

三つのグループに大別されるユートピア的生活共同体が共有した思想に加え、同時代に流行し社会改革を指向したもう一つの思想に「スピリチュアリズム」(spiritualism)というものがある。これは日本語ではしばしば「心霊主義」と訳される思想である。

スピリチュアリズムの流行は1848年に起こった「ロチェスター・ラッピング」(Rochester Rapping) と呼ばれる事件に始まる。事件は、ニューヨーク州西部の都市ロチェスター近郊のハイズヴィルという町で起こった。メソジストの農夫ジョン・フォックス (John Fox) の一家がこの町に引っ越してくると間もなく、夜になると原因不明の物音が聞こえるようになる。3月のある夜、ジョン・フォックスの妻が二人の娘13歳のマーガレット (Margaret) と12歳のケイト (Kate) に、ベッドで静かに寝て、物音が聞こえても気づかぬふりをしているようにと厳しく言いつけると、物音はその言いつけに対抗するかのようになり、今まで以上に大きくしつこくするようになった。何者かが外で音を立てているのかと思い、ジョンはドアや窓にカギがかかっていることを確かめると、その行為をあざ笑うかのようになりまた物音がする。娘のマーガレットが指を弾いて、原因不明の音の正体に明るく話しかけると、その指の音に反応して物音がすることに気づいた。今度は声を出さず、指の動作だけで音を立てているものとコミュニケーションを取ろうとすると、その無言の動作にも音は反応してきた。つまりその音を立てているものは、聞くことも見ることもできるということだ。フォックス夫人が勇気を奮い起こし、娘のマーガレットとケイトの歳を尋ねると、物音は正しい歳の数だけ鳴った。「その音を立てているのは人ですか？」と問うと反応はなく、「あなたは霊ですか？」と問うとすぐに音が鳴り反応した。その夜、フォックス家の人々が呼んでき

た近隣の人々を前にしても同じ現象は起き、それ以来、フォックス家で起こっている心霊現象は、信じる者もあざ笑う者も含めて、町中に知られることとなった。これが「ロチェスター・ラッピング」と呼ばれる事件の始まりである。(Fornell 9-12)

その後、心霊現象は特にマーガレットとケイトの姉妹に頻繁に起こるようになり、物音が起こるラッピング現象だけでなく、家具が動いたり、呻きのような声が聞こえたりして、姉妹を悩ませるようになった。また、フォックス家には噂を聞きつけた人々が絶えず訪ねてくるようになり、心配した両親はケイトをニューヨーク州オーバーンに送り、結婚してロチェスターに住む一番上の姉リア (Leah) にマーガレットを預けることにした。リアはロチェスターで音楽教室を経営していたが、妹たちに起こる心霊現象の悪い噂のため、生徒を失った。そこでマーガレットを霊媒として、心霊主義に関心を持つ人々を集めては降霊会を開くようになる。また、心霊主義に熱心なグループは、市内で最大のホールを借り、ラッピング現象についての講演や実演を行い、またマーガレットが起こす心霊現象についての調査を行う委員会を組織した。こうして姉のリアによるマネージメントで、マーガレットは霊媒として活躍するようになり、やがてニューヨーク市の見世物興行で当時有名だったバーナム・ミュージアム (Barnum's American Museum) でも心霊現象の興行を行なうようになる。(Fornell 14-18, 24-26)

1848年のフォックス姉妹によるロチェスター・ラッピング以来、霊媒と称する人々が次々に現れ、心霊現象に関心を示す人々を相手に降霊会を行ない、またトランス状態の霊媒が霊からのメッセージを伝える講演を行なうようになった。他方で心霊現象に懐疑的な人々は、たびたびその真偽を確かめるために調査を行なった。死者の霊との交信を信じるスピリチュアリズムは瞬く間にアメリカで流行し、アメリカにとどまらず大西洋を渡り、イギリス・フランスといったヨーロッパにまで伝わった。

19世紀半ばのアメリカ社会で、スピリチュアリズムがこれほど流行した背景あるいは理由としては、以下の三つの点が挙げられる。第一に挙げられるのが消費社会である。産業の発展に伴い、社会に生活必需品以外の商品が次第に増えてきたのもこの時代である。19世紀半ばは、今で言う消費社会の始めの段階とも言われる。その消費社会、つまり物の増加は、人の死にも関わってくる。たとえば、この時代、愛する人の死後その人の顔を描いた絵や、後には写真を大事にとっておくという習慣もこの時代に始まっ

た。また、娯楽の一要素として文学の世界では、他の時代と比較しても、より多くの幽霊物語が発表され、読まれたと言われている。(McGarry 23-24) 消費社会とスピリチュアリズムの関係は、当時新しい商業の形として盛んになりつつあったカタログ販売の商品に、「プランシェット」(planchette) といわれる自動筆記器具が含まれていたことからわかる。プランシェットは、キャスターのついた板状のものの先にペンを差し、手を上に載せると霊の導きにより自動的に文字あるいは絵を描くというものである。(Braude 24-25) このような道具が女性向け装飾品などと並んでカタログに載せられたことから、一般の人々の間でいかにスピリチュアリズムが流行していたかがわかる。それは言い換えれば、神秘に包まれた目に見えないものだった人の死あるいは霊というものが、消費文化の中で商品を介して目に見える形で現れたとも言えるだろう。

スピリチュアリズム流行の第二の理由として、アメリカ人の短命化が挙げられる。1790年以降、腸チフスや黄熱病、結核といった伝染病の流行により、1861年に始まる南北戦争まで、アメリカ人の平均寿命は短くなったことが指摘されている。(McGarry 22-23) 幼い我が子を病気で失った後、親がその死を嘆くのは当然である。もし人の死後、肉体は消滅してもその魂は霊として存在し続けているのであれば、そして特殊な能力を持つ人間がその霊とコミュニケーションを持つことができるのであれば、失った子供の霊が今どのような状態にいるのか知りたいと親が思うのも自然である。このような事情から、愛する人を失った人々がスピリチュアリズムの存在を知り、霊媒と称する人を訪ね、亡くなった人の死後の消息を尋ねた。フォックス姉妹の登場以降、多くの霊媒が現れ、スピリチュアリズムが流行した背景にはこのよう

**THE BOSTON
PLANCHETTE**

From the Original Pattern, first made in Boston in 1800.



Within a few months past there has been brought before the community a little board variously noted in the papers; the *Boston Traveller*, of May 21st, describes it as follows:

AN ASTOUNDING NOVELTY IS "PLANCHETTE."

Which is only a little board in shape like a hour, placed on wheels or castors, with a pencil in front. When the fingers are gently placed on Planchette, in a few moments it becomes animated, moves along of its own accord, answers mental or written questions, talks with you and does many wonderful things. In November 18th number of *Every Saturday*, the wonder workings of Planchette are described by an English writer.

As Planchette has been extensively noticed in most of the leading papers of the day, it is unnecessary to say further of it than the following from the *Boston Traveller*.

In *PLANCHETTE* a *HUMANOID*—On this point there is a great difference of opinion. That Planchette is full of vapours there is no question of doubt; with some it is as stubborn as Mr. Malinsbury's pig, with others it is docile and quick to answer questions, interprets the thoughts of looking on, and not only tells of past occurrences unknown to the operator, but will also give the date of warning of the future. All in all, Planchette is a wonderful institution, full of fun, puzzle and mystery and a pleasant companion in the home.

Have Planchette in the family, by all means. If you desire a novel amusement.

After various experiments to produce a wheel as a substitute for the *Planchette*, which of necessity caused Planchette to be sold at so high a price, a very neat, tasteful and durable wheel has recently been applied, which reduces the cost of Planchette one-half the former price, and for which the subscriber has exclusive control under the Patentee and manufacturer, and is now ready to fill orders with promptness.

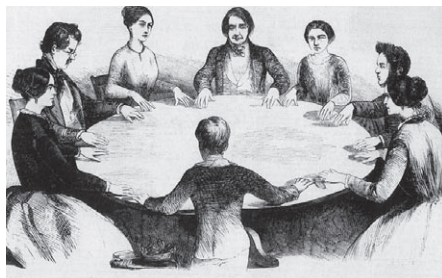
Planchette, black walnut board, neatly finished, . . .	\$1.00
Hollywood, handsome fretted work,	2.00
Hollywood, beautifully painted,	3.00

FOR SALE BY
G. W. COTTRELL,
30 CORNHILL, BOSTON.

商品として売り出された自動筆記器具「プランシェット」(Braude n.p.)

な事情があったと言われている。

スピリチュアリズム流行の第三の理由は、科学・テクノロジーの発達である。人の死後、その霊が存在し続けるといふ信仰と、科学の発達は相容れないもののように、特に現代の私たちには思われる。しかしこの時代は、電気による人の目に見えない物理現象が証明され、それが応用



降霊術サークル (Braude n.p.)

されて、電信術のように数千キロ離れた人間同士がコミュニケーションを持つことができるようになったばかりの時代である。ラッピング現象や降霊術を見聞きした人々が、その現象はまだ科学的に解明されていないが、死後の人間の霊と交信することを電気や電信と類似したイメージで考えても不思議ではない。事実、スピリチュアリズムを信じた人も疑った人も、その流行後こそって科学的に心霊現象を調査しようとしたのは、明らかに科学の発達と科学への信頼があったからである。(McGarry 6, Moore 14, 43) こうした科学の影響は、スピリチュアリズム流行後、急速に広まった降霊会の形式にも見られる。降霊術のサークル (séance circle) に集まった人々は、男女が左右対称に着席し、秩序だった対称性を示した形で霊との交信を試みた。これは発展しつつある科学の経験主義を反復するものだった。(Carroll 135-37) 自然科学の世界で、実験室である同じ条件の下で同じ現象を何度でも再現できれば、その現象は物理的に証明されたことになる。降霊会でも、ある同じ条件、ここでは参加者の座る位置やそれぞれの手の接触の仕方といった厳密に統制された条件で、霊との交信がいつでも可能であるということ、つまり反復可能な現象であることを証明しようと参加者が試みていたことが伺える。

フォックス姉妹によるロチェスター・ラッピングの発表以後、スピリチュアリズムが急速に流行した背景には、以上述べたような、消費社会の出現・人々の短命化・科学やテクノロジーの発達など、社会の複数の要素があったと言われている。この複数の要素が示すことは、スピリチュアリズムを娯楽として受け入れた人々がいた一方で、哀しみを癒すための手段として、あるいは科学的に証明できる物理現象として、スピリチュアリズムと真剣に向き合った人もいたということである。

ユートピア的生活共同体を形成した前述のシェーカーは、スピリチュアリ

ズムに真剣に向き合った人々と言えるだろう。彼らの特異な形の礼拝の中では、たびたびメンバーがトランス状態に陥ったことが記録されている。これは同時代に流行したスピリチュアリズムとの相互関連を示す事実と考えられる。また、社会改革思想という点でも両者は関連性を持っていた。シェーカーたちが、特に女性の地位について独自の考えから、共同体での男女の関係が規定されて



礼拝中トランス状態で倒れるシェイカー女性
(Foster n.p.)

いたことはすでに指摘したが、女性の解放という社会改革に向かう姿勢を、スピリチュアリズムを信奉する人々も共有していた。

スピリチュアリズムはもちろん、霊との交信という現象に娯楽を求め、興味本位の人々が関心を示したために流行したという側面は否定できない。しかし、スピリチュアリズムが単に娯楽の一つを提供しただけで、その流行に伴い、霊媒と称する人々が多数現れ、心霊現象を一つのビジネスとして利用したという側面だけを捉えたのでは、19世紀に流行したスピリチュアリズムの本質を理解したことにはならないだろう。なぜなら、スピリチュアリズム流行のもう一つの要因となったのが、心霊現象を真摯に受け止め、社会の進歩を信じて、急進的な社会改革に向かう人々だったからである。19世紀に現れたスピリチュアリストの多くは、一般の社会で喧伝されていた奴隷制廃止・女性解放・健康改革・禁酒といった思想を共有していた。スピリチュアリズムを信仰する人々は、人が死んだ後、その霊は存在し続けると考えた。そしてその霊が存在するのは天上の世界で、そこは人間の現世に見られるような矛盾はなく、調和のとれた世界が実現しているとの信仰があった。スピリチュアリズムを信仰する人々は、霊の存在するその調和のとれた世界を現世にも再現しようとした。そこで現世における具体的な社会矛盾・社会問題に目を向け、それを正すために霊界からのメッセージを、霊媒を通して得ようとしたのである。(Guarneri 350-51)

霊媒は多くの人々を町のホールに集めて講演会あるいは演説会を行った。霊媒は霊を呼び出し、時にはトランス状態になって、霊の声としてそのメッセージを聴衆に伝えた。もちろん霊が霊媒に乗り移るといふ現象を見ること

が目的の、興味本位の聴衆が多数集まったことは容易に想像できる。しかし他方で、その霊界からのメッセージを、社会の進歩を目指す新しい思想として受け入れた人がいたことも事実のようだ。そこには奴隷制の問題や女性の地位の問題が含まれていた。霊媒が本当に霊界からのメッセージを伝えていたのかどうかについて疑うよりも、むしろ霊界からのメッセージとして、社会改革思想が霊媒によって語られ、その思想を吸収していく聴衆が多数存在したという事実、この時代の特徴を読み取るべきだろう。また、女性解放といった霊界からのメッセージを伝える霊媒は、女性が圧倒的に多かったという事実からも、この時代における文化的に作り上げられた男女の区別、ジェンダーの問題を考えることも可能だろう。

スピリチュアリズムと社会改革思想あるいは社会改革運動との関係は、19世紀前半に発表された文学作品からも読み取ることができる。たとえば、1851年に発表されたナサニエル・ホーソーンの『七破風の家』(*The House of the Seven Gables*)では、中心的登場人物の一人であるホルグレイヴ(Holgrave)という若い銀盤写真師が、スピリチュアリズムと関係を持つ催眠術の一種メスメリズム(mesmerism)を実践している。彼は同時に、フリーエ主義に基づくユートピア的生活共同体に滞在した経験を持ち、禁酒思想家など急進的社会改革思想家と付き合っていると噂される人物だ。つまりホルグレイヴという登場人物は、急進的な社会改革思想をユートピア思想とスピリチュアリズムが共有していたという事実を集約した人物として設定されている。

スピリチュアリズムと急進的社会改革思想のこうした関係は南北戦争後まで続いていたようで、両者の関係は19世紀後半の文学作品でも描かれている。例えば1886年に発表されたヘンリー・ジェイムズ(Henry James)の『ボストンの人々』(*The Bostonians*)では、主人公の若い女性ヴェリーナ(Verena)が霊媒としての能力を持ち、その霊媒としての能力を使って女性解放の思想を伝えるために各地で講演を行う。この小説は19世紀のアメリカ北東部ボストンにおいて、女性解放運動が盛んに展開された事実と同時に、スピリチュアリズムも流行して、両者が相互に関連性を持っていたという事情をよく表している。

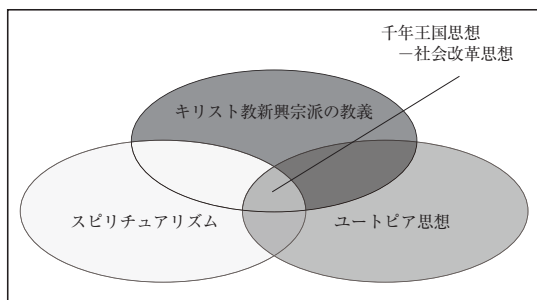
また、現実の社会においても1870年代には、ヴィクトリア・ウッドハル(Victoria Woodhull)という女性霊媒が現れ、大統領選挙に立候補した。立候補したと言っても、まだ女性参政権が認められていない時代に正式な大統領候補として社会から女性が認められるはずもなく、彼女の立候補は公式の記

録としては残っていない。しかし、『ボストンの人々』の主人公ヴェリーナと同じように、ウッドハルもまた霊媒として活躍し、高等教育を受けていないにもかかわらず、霊の導きにより様々な社会改革についての文章を発表し、また大衆の前で演説をした。そして女性が公衆の前で演説するのが認められていない時代に、女性の解放を主張し、また社会の不正を糾弾して、社会からは激しい非難を受けた。しかし同時に彼女は、エリザベス・キャディ・スタントンたち女性解放運動家とも一時期共に戦い、スピリチュアリズムを信仰する大勢の人々からも支持を得た。

こうした文学作品の登場人物や実在の人物は、南北戦争をはさむ19世紀の二つの時期において、スピリチュアリズムを信じる人たちが、死者の霊との通信だけでなく、その霊界からのメッセージを受取り、社会改革思想を持つに至ったことを示している。

IV 社会改革思想とユートピア運動・心霊主義を結ぶもの

社会の発展を背景に、19世紀前半のアメリカ人は様々な社会矛盾を意識するようになり、奴隷制廃止運動や女性解放運動などの社会改革運動が現れた。そして一般の社会で意識された社会改革というものを、同時代に流行したユートピア運動とスピリチュアリズムに関与した人々も共有していた。ユートピア的生活共同体に参加した人々とスピリチュアリズムを信じた人々を社会改革思想という点で結びつけたものは、「千年王国思想」(millennialism) と呼ばれるキリスト教のなかの考えだった。



千年王国思想を核として共有された社会改革思想

千年王国思想とは、簡単に言えば、イエス・キリストがもう一度復活し、それからの千年間人々が幸福に生きる社会が実現する、つまり千年王国が到来するという信仰で、これは新約聖書「ヨハネの黙示録」第20章の内容に基づく。そして千年王国がこの世に現れるまでに、現世をできるだけ改革して

おくことが千年王国を待つ人間の義務だと、19世紀前半にこの思想を信仰した人々は考えた。(Green 16-17) この千年王国思想を持っていたのが、ユートピア的生活共同体を形成したグループであり (Foster 62, 80, Guarneri 68)、またスピリチュアリストであった (Carroll 101-2)。その結果、千年王国思想がその結び目となるように、たとえば、ユートピア的生活共同体のメンバーが同時にスピリチュアリズムを信仰していたり、また、千年王国思想を持つキリスト教の宗派に属する人がスピリチュアリズムも信仰したりという現象が起こった。

千年王国思想というキリスト教における信仰が、ユートピア運動とスピリチュアリズムを結んだという事実は、それぞれが盛んだったニューヨーク州西部という土地からも説明することができる。ユートピア的生活共同体の一つであるオナイダ・コミュニティはこの地にあり、また、フリーエのユートピア思想に基づくコミュニティがいくつもニューヨーク州西部に作られた。また、フォックス姉妹がラッピング現象を発表し、スピリチュアリズム流行のきっかけとなった都市ロチェスターや、女性の権利を求める大会が初めて開催されたセネカ・フォールズも、ニューヨーク州西部の都市だった。

ニューヨーク州西部は、前述のように、エリー運河開通に伴う人口移動によりキリスト教の信仰復興運動、いわゆる第二の覚醒の影響を強く受けた土地である。第二の覚醒の影響を強く受けたという意味で、この土地は「焼き尽くされた地域」(the Burned-Over District)とも呼ばれ、その結果、ここではキリスト教の新しい宗派が栄え、その新しい宗派の多くが千年王国思想を持っていたと言われている。例えば、ウィリアム・ミラー (William Miller) を指導者とするミラー派と呼ばれる宗派は、キリストの復活する日を具体的に預言したし、ユートピア的生活共同体を形成したシェイカーもやはり千年王国思想を持っていた。他にはクエーカーと呼ばれるイギリスでシェイカーの母体となった宗派も、信仰する多くの人々がニューヨーク州西部に移り住んだ。そしてスピリチュアリズムの端緒となったロチェスター・ラッピングでフォックス姉妹をサポートしたのは、奴隷制廃止運動で活躍している急進派クエーカーの夫婦だった。これらのことはキリスト教の新興宗派とスピリチュアリズム、ユートピア思想の思想的共通点、つまり千年王国思想が結ぶ両者の関係を明らかにしている。

千年王国思想を信じる様々な人々は、現世における社会矛盾の克服を目指し、奴隷制廃止や女性の地位向上などの社会改革思想を共有した。社会改革

を目指したキリスト教の新興宗派の信徒、ユートピア的生活共同体の参加者、そしてスピリチュアリズムを信じる人々の間には、それぞれの中に共通する要素、千年王国思想の存在があったと考えられる。その背景には、産業の発展を支えたテクノロジーの発達とも関連して、社会は進歩していくものであるという信念が人々をとらえていたのではないだろうか。社会の進歩を信ずるこうした思想が、キリストの復活という信仰と一緒に、社会の問題は解決可能であるから社会改革を推し進めるべきだという考えを複数のグループが共有したのである。

人種やジェンダーという今日の問題は、アメリカ合衆国においては19世紀前半に奴隷制や女性の地位について疑問を持つことから始まったとも言える。この時代は、合衆国建国後半世紀以上が経過し、千年王国思想を結節点として、キリスト教新興宗派・ユートピア的生活共同体・スピリチュアリストといったグループがその構成メンバーを重複させながら、未来の社会に対するヴィジョンを提示した時代だと言える。

引用文献

- Braude, Ann. *Radical Spirits: Spiritualism and Women's Rights in Nineteenth-Century America*. Boston: Beacon, 1989.
- Cross, Whitney R. *The Burned-Over District: The Social and Intellectual History of Enthusiastic Religion in Western New York, 1800-1850*. Ithaca: Cornell UP, 1950.
- Carroll, Bret E. *Spiritualism in Antebellum America*. Bloomington: Indiana UP, 1997.
- Evans, Sara M. *Tidal Wave: How Women Changed America at Century's End*. New York: Free Press, 2003.
- Fornell, E. *Unhappy Medium: Spiritualism and the Life of Margaret Fox*. 1964; Ann Arbor: UMI, 1996.
- Foster, Lawrence. *Women, Family, and Utopia: Communal Experiments of the Shakers, the Oneida Community, and the Mormons*. Syracuse: Syracuse UP, 1991.
- Green, Harvey. *Fit for America: Health, Fitness, Sport and American Society*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1986.
- Guarneri, Carl J. *The Utopian Alternative: Fourierism in Nineteenth-Century America*. Ithaca: Cornell UP, 1991.
- Jefferson, Thomas. *Thomas Jefferson*. The Library of America. New York: Literary Classics of the United States, 1984.
- McGarry, Molly. *Ghosts of Futures Past: Spiritualism and the Cultural Politics of Nineteenth-*

Century America. Berkeley: U of California P, 2008.

Moore, R. Lawrence. *In Search of White Crow; Spiritualism, Parapsychology, and American Culture*. New York: Oxford UP, 1977.

付記

本稿は、2010年8月に日野ケーブルテレビで放映された実践女子学園TV講座の原稿に加筆・修正を施したものである。